

Interview with the **Brilliant** **S**tudents

受賞学生インタビュー

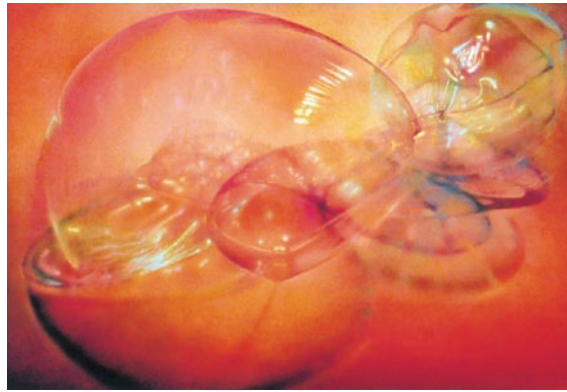
藝大に在学している学生たちは、多くの公募展やコンクールで栄誉ある賞を受けている。受賞学生たちが賞にいたる努力とさらなる意欲を語る。

新連載

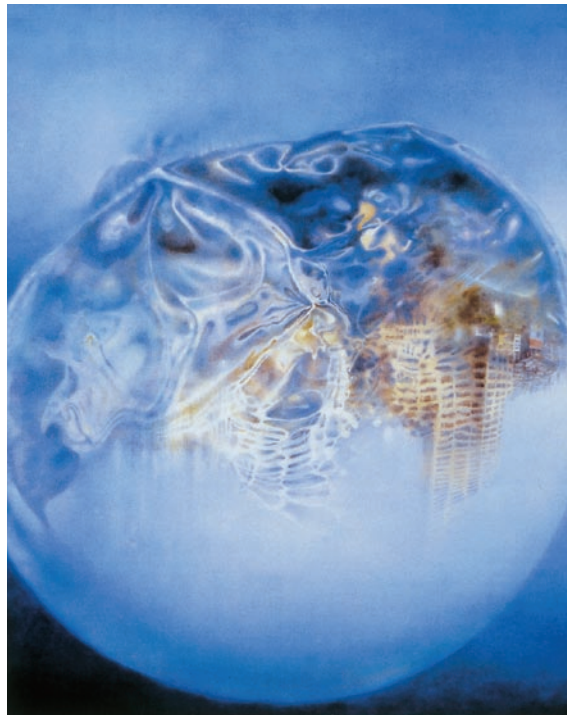
福島沙由美

◆美術学部絵画科油画専攻三年

トーキョーワンダーウォール公募二〇〇八大賞
第二十六回上野の森美術館大賞展大賞



トーキョーワンダーウォール公募2008大賞受賞作品「浸染39.5°C」
oil, canvas 130.3×194cm



第26回上野の森美術館大賞展大賞受賞作品「視点の境界線」
oil, canvas 162×130.3cm



ふくしま・さゆみ
1982年東京生まれ。個展に「浸透染着」ギャラリーQ（東京・2005年）、「颯鏗硝」ギャラリーQ（東京・2006年）、「緋霜」ギャラリーQ（東京・2008年）、「トーキョーワンダーウォール都庁展」東京都庁（東京・2009年）がある。2009年4月28日～5月11日まで上野の森美術館ギャラリー（東京）「第26回上野の森美術館大賞展・入賞者展」、6月6日～28日まで「TWS-Emerging 2009」トーキョーワンダーサイト本郷（東京）に参加予定。

子

子供のころは絵を描くのが大嫌いだっただんです。物語をイメージして描くように言われても、見たことのないものは描けないとずっと思っていました。

小学校五年生のとき、買ってもらったばかりのお気に入りの靴を描いてみたら、「みんなのお手本にしよう」と褒められたのがうれし

くて、調子に乗って美術部に入ったんです。中学二年のときにはコンクールで、水道のポスターが都知事賞を取りました。油絵に絞ろうと決めたのは、高校二年のときです。

「トーキョーワンダーウォール」の公募展で大賞を受賞した作品「浸染39.5°C」は、大学に入る前から描いていたシリーズの延長線上にあるものです。

このシリーズは、気象をテーマにずっと描いているのですが、天候や気温は人に何らかの影響を与えていると思っっているんです。たとえば嵐の前線が近づいて気圧が下がると温度が上がると、人は虚無感に取りつかれます。また前線が通過して温度が下がると、人の気持ちは軽やかになると言います。今回の

作品に付けた「39.5°C」は東京都

の観測史上最高気温で、シリーズの総まとめとして、その数値からイメージしたものを描きました。

わたしの絵は、抽象と具象の中間のポジションにあるもので、そのどちらにも属さないと思っています。見たことのないものでどのように作品をつくるか、ということを探しているとき、モチーフがなかったら自分で創ってみようと考えたんです。

上野星矢

◆音楽学部器楽科（フルート）二年

第八回ランバル国際フルートコンクール一位

そこで取手校地のガラス工房に籠ってつくったオブジェを素材に作品を描くようになりました。

上野の森美術館の大賞受賞作「視点の境界線」も、ガラスの球体をモチーフにした作品です。ガラスとい

うのは固体でも液体でも気体でもない曖昧な物質で、それをおして世界を見ることで、ふだんは成立している世界が徐々に崩れてくるのです。しかも正円ではなく、凹凸があることで世界はより歪んでいきます。

また、この絵は上下を逆転しても逆さから見ることでもできるんです。ガラスの持つっている曖昧な属性と、どちらが正しいとは言いきれない不確かな視点をテーマにしています。大きな賞を受賞したことで、企画

展をはじめの作品を展示する機会が増えました。制作に追われる慌ただしい日々ですが、これからは見ず知らずの人がわたしの作品を見てくれるようになると思うと、プレッシャーでもあり大きな楽しみでもあります。

小

学校の吹奏楽部に隣の学校から熱心な先生が教えにこられるというので、

入部してフルートを始めることにしたんです。音が大きい楽器には興味がなかったので、金管よりも木管、木管のなかでもフルートを自然に選んでいました。とても尊敬していたその先生が、ぼくが小学校六年の時に病気で亡くられました。先生には「将来は音楽家になってほしい」と言われていて、それから本格的に音楽家をめざすことを決意したんです。

中学一年の時に練習に打ち込んで挑んだ「全日本学生音楽コンクール 東京大会 中学校の部」では奨励賞止まりでした。中学二年の時に出場

した同コンクールで、東京大会では一位を受賞し全国大会に駒を進めたのですが、全国大会では一位を逃してしまいショックで号泣してしまっただんです。あまりの悔しさと怒りでそれを境に人格が変わり、コンクールに対する激しい情熱も芽生ええました。

演奏スタイルも大きく変わって、練習したことを上手く出せることで満足していたものが、自分の表現を人に届けるために吹くようになり、その結果、中学三年の時に同じコンクールで全国一位を受賞することができたのです。

でも中学時代は音楽漬けというわけではなくて、サッカー部に所属してスポーツにも打ち込みました。サ

ッカーで得た反射神経や、流れを体で受け止める感性はいまでも役に立っていると思います。

藝大に入ってみると、周りのレベルの高さはものすごく、演奏に対するモチベーションや意識の高さを感じますね。高校の時と比べると大きな社会に出てきた感覚があります。

今回第一位になった「ランバル国際フルートコンクール」は、初めて参加する海外でのコンクールでした。フルートの巨匠ジャン・ピエール・ランバル氏が生前に自ら創設した、フルート界では大変権威のあるコンクールなのですが、参加してみた印象はとても「和やか」なものでした。コンクールを通して、好きな演奏家を見つけたという楽しみ方をしてい

る観客もいますし、審査員の先生方も気軽に話しかけてきてくれるのです。

また、海外のコンクールでは日本のコンクールに比べ、より独自の表現やアプローチ、パフォーマンスに対して関心が集まるように感じました。「演奏家ではなく、芸術家、表現者になってほしい」というある審査員の方の言葉は、胸に深く刻み込まれました。

技術が上手くなることで楽器に慣れてしまうということを、ぼくは避けたいと思っています。つねに新鮮で感動的にフルートに向き合い、演奏家ではなく表現者と呼ばれるようになりたいと思っています。



うねの・せいや
1989年生まれ。堀井恵、山田ゆう子、立川和男、ザビーネ・ザイフェルト、ヴァンサン・リュカ、金昌国の各氏に師事。2004年、大友直人指揮・東京交響楽団と共演。2005年、チェコフィルハーモニー八重奏団と共演。2009年3月17日（火）にはオペラシティ・イリサイタルホール（東京初台）にて演奏会を開催。



1位を受賞した第8回ランバル国際フルートコンクールでの演奏風景。2008年10月。